輪島学講習会

【第５回】

『北前船・角海家について』

<講　師>

黒島地区まちなみ保存会

川　端　一　人　　氏

於いて商工会議所　　3月12日

北前船について

1、北前船とは

どんな船。大きさ

船の乗組員構成　図面参照

2、北前船の商法

積み荷、寄港地、買積み船

板子一枚下は地獄の商売

3、黒島の主な船主

4、北前船と総持寺や漆器の関係

5、天領黒島について

角海家について

1、回船業の歴史

起業、持ち船

2、住宅及び土蔵

建物の変遷 大火により消失、間取り

能登半島地震の影響

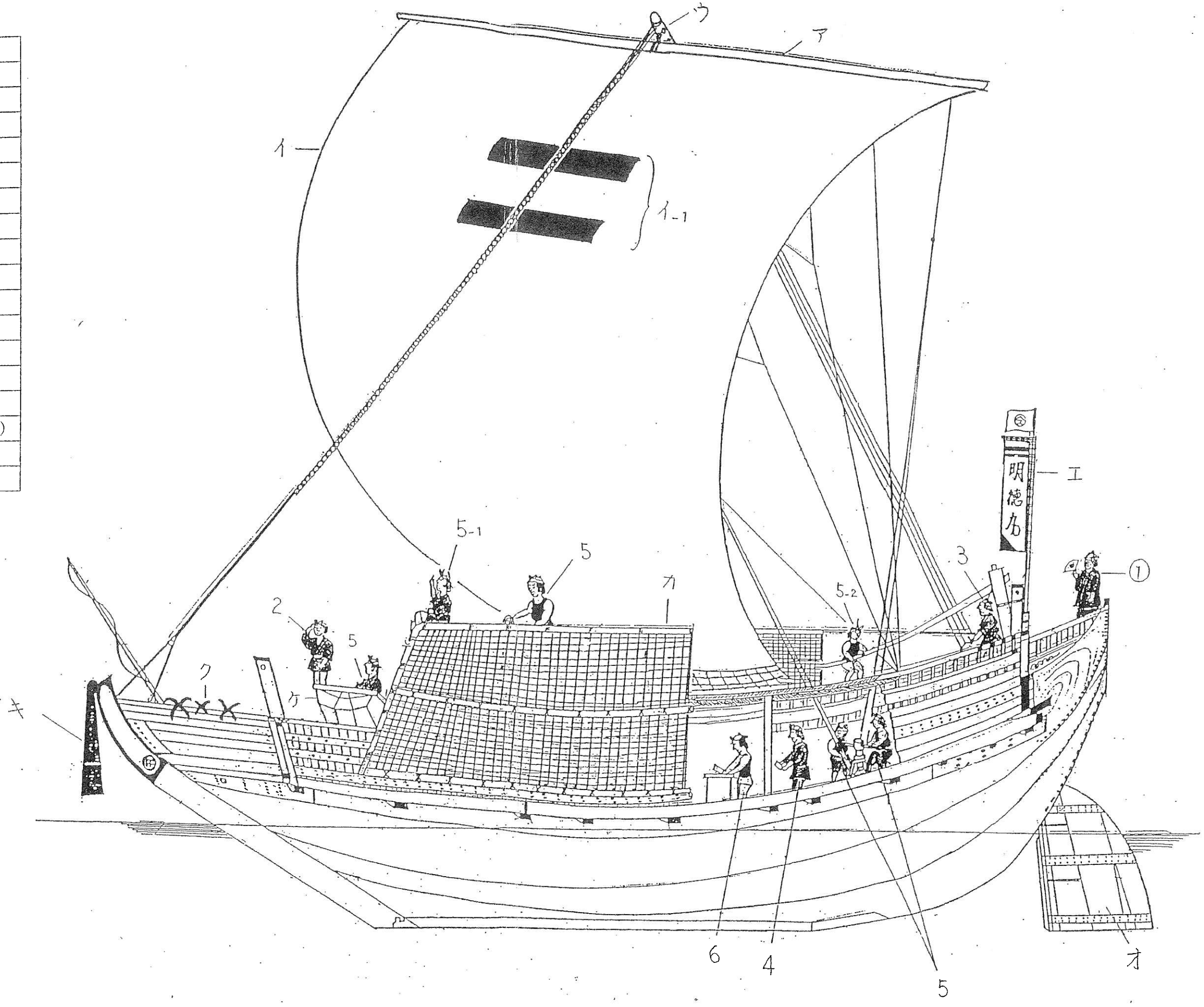
3、角海家の功績

各方面に寄付

4、回船業廃業後の生業

銀行業に転業 （能和、北国）

ア	帆桁
イ	帆
イ-1	帆印
ウ	蝉
エ	幟旗
オ	舵
カ	蛇腹垣
キ	下がり
ク	四爪碇
ケ	伝馬船
1	船頭（船長）
2	表（航海士）
3	親父（水夫長）
4	知工（事務長）
5	水主（若衆）
5-1	肩表（航海士補佐）
5-2	楫子（操舵手）
6	炊（炊事係）

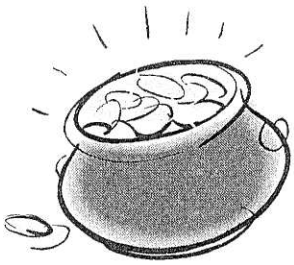


北前船の乗組み構成

北前船の船主や船頭は、船の運航の知識ばかりでなく、商才も必要とされました。

船頭たちは、新春早々に故郷から船囲(ふながこ)いしてある大阪などに出向き、船を整備して積荷を仕入れ、蝦夷地(えぞち)(今の北海道)に向かいました。時代によって変化はありますが、千石積の船ではおよそ船頭以下10～15人が乗り組みました。乗組員の構成は、船頭を頭に、知工(ちく)・親父・表・水主(かこ)(若衆(わかしゅう))及び炊(かしき)からなりその職の階級や仕事分担等については大変厳(きび)しい掟(おきて)(決まり)がありました。

給金は年給で、運賃積の船に比べると低いが、船主に雇われている沖船頭には、「帆待(ほま)ち」という自分の商売用の荷物の持ち込みが許され、他の乗組員には「切出(きりだ)し」と呼ばれる歩合による割増しがあり、当時としては結構よい収入でありました。特に船頭は、「帆待ち」による利益が大きく、『船主船持ち、船頭金持ち』と言われたくらいでした。



北前船の大きさ　－千石船の場合－

＊ 必ずしも一定ではありません。大体のめやすとしてご参考になさって下さい

【 船 体 】

全　長：およそ３０メートル

肩幅（最大幅）：７．４メートル

【 帆 柱 】

高　さ：２７メートル

直径（根元）：７５センチ

【　梶　】

重　量：３トン

【積載可重量】

１５０トン積

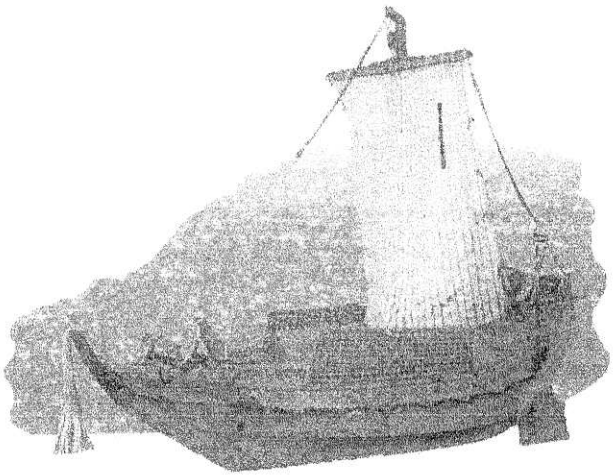
【平均時速】

７ノット（≒１３ｋｍ／ｈ）

【 材 料 】

主に杉、松、檜

※ 大阪の復元船「辰悦丸」を造るには１０ﾄﾝ積トラック１７台分を要したそうです。



北前船(きたまえぶね)ってどんな船？

「北前船」とは、江戸時代後期から明治にかけて活躍した和船(わせん)（日本の船）の呼び名です。では、どういった船を「北前船」と呼んだのでしょう？

それには次のような４つの条件があります。

１．大阪から瀬戸内海を抜けて日本海沿岸を蝦夷地(えぞち)まで北上する「西廻り航路(にしまわりこうろ)」を行き来する。

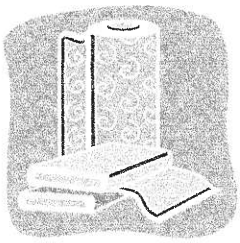
２．船の形が北国船(ほっこくぶね)、羽賀瀬船(はがせぶね)、弁財船(べざいぶね)、合(あい)の子船(こぶね)のいずれかである。

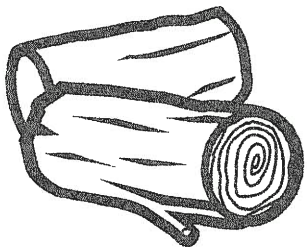
３．船の持ち主又は船頭が日本海側の者である。

４．乗組員達が仕入れた荷物の一部（一割以内を限度とする）を寄港地で自分達で売り捌(さば)く「買積(かいづ)み」という商法を行っている。

北前船が運んだ主な荷物は、春の北上のときには、米・酒・調味料・衣料・鉄・蝋(ろう)・油・雑貨等を積み込み、帰りには北海道や東北から肥料となるニシンのしめかす・海産物・木材等を運びました。

北海道で喜ばれたのは何よりも藁(わら)と竹でした。北海道ではお米も竹も作ることが出来なかったからです。

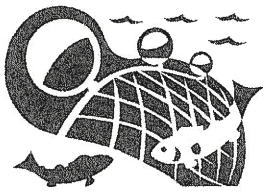




それにしても、なぜ、遠い北海道からわざわざ肥料を運んで来たのでしょう？それには、次のような訳がありました。

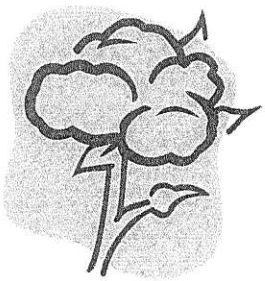
その頃、愛知県の三河地方を中心として綿の栽培が、また、四国の徳島では藍(あい)の栽培が盛んになりつつありました。しかし、千葉の方で作っているイワシの肥料だけでは流通量が少なく、関東方面しかまかなえませんでした。そこで、目をつけたのが北海道のニシン漁だったのです。

当時の北海道では「ニシン御殿(ごてん)」と呼ばれる大きな蔵が建ち並ぶほど、ニシンが豊富に獲(と)れました。



そして身欠きニシンを作った残(ざん)を捨てずに樽(たる)に詰めて持ち帰ったのです。北前船が運んだ肥料のおかげで、作高(さくだか)（収穫量(しゅうかくりょう)）が増え、手ごろな価格となった綿は、北前船によってさらに広まっていったのです。

同時に綿は船の帆布(ほぬの)にも使われるようになり、船の帆走性能(はんそうせいのう)が良くなり、北前船にとっても嬉(うれ)しい結果をもたらしたのです。



黒島船問屋年表

1570年頃　番匠屋善右ヱ門　起業
（元亀元年）「長栄丸」外十数隻を所有
元禄、享保、元文の頃に最も栄えた

約150年間

1723年　森岡屋又四郎　起業
（享保8年）総持寺御用船主として発足
番匠屋より中古船「宝珠丸」を買入れて営業
を創め、享保10年、これを「三木丸」と改名する
「常盤丸」外十八隻を有し、天明、寛政の頃に
最盛期を迎える

約100年間

1781年頃　濱岡屋弥三兵衛　起業
（天明元年）「八幡丸」外十三隻を所有
文化、文政の頃が最盛期　約60年間

1804年頃　中谷藤五郎　起業
（文化元年）「人力丸」外十三隻を有し、樺太へも進出
天保、嘉永の頃に活躍した

鍋屋甚兵衛
船形曳山を寄進

約50年間

1843年　角海孫左ヱ門（一久）　起業
（天保14年）「朝日丸」「清朝丸」外数隻を所有
文久、慶応の頃から明治初期にかけて活躍

1850年
（嘉永3年）

濱岡屋、中屋の寄進により南
町曳山が造られる

1868年
（明治元年）

藩政末期
角海家等により北町曳山が造
られる

＊この他にも　中谷藤三郎、樽屋惣四郎　及び
七野（山七）、吉田（丸辰）、玉木（丸玉）等が
明治初期に亘り、盛んに活躍する

『天領』ってなぁに？

● 天領とは？

徳川幕府の直轄地（幕府が直接支配する土地）のこと。幕府の経済的基盤を為すもので、重要地には奉行、郡代、代官などを配置した。

例えば、佐渡には金山奉行、高山には郡代を幕府からの役人として派遣した。

● なぜ黒島が天領に？

加賀藩主「前田利家」のいとこにあたる陸奥（福島県）窪田藩主「土方雄久」に越中（~~新潟県~~富山県）・新川郡に一万石の領土を与えていたが、後になってその領土が前田家にとって非常に大切な場所になったので、慶長１１年（1606）、能登に散在する６１ヶ村・一万三千石と交換してしまった。交換された村々をみると、戸数のわりに田地の少ない所や収穫量のあがらない所、穴水の様に前田氏よりも「長氏」を有難がっている土地や、時国村の様に「時国」という豪族のいる所など、前田氏が治めにくい所や、治めていても損な村ばかりを集めたようである。

黒島もその内の一つだったのである。

しかし、その後、貞享元年（1684）土方隆雄が武家諸法度（御家騒動）に触れて罰せられ、領地を取り上げられた為に能登の土方領であった村々は幕府の直轄地となってしまった。

これは幕府が、当時、最も大きな藩であり、有力な大名であった前田氏を監視する為に、いろいろと理由をこしらえて土方領を取り上げ、前田藩の中に幕府の天領をつくる為だったとの説がある。
かつて太閤豊臣秀吉に忠誠をつくした重鎮は、徳川家にとっては目の上のたんこぶだったようである。

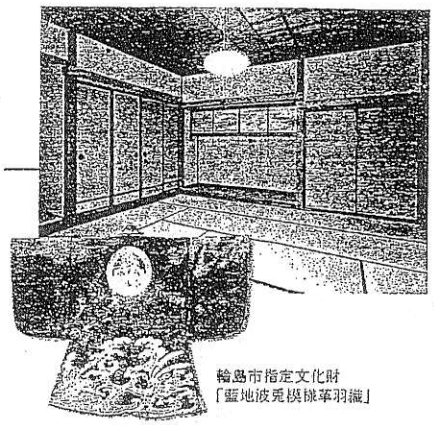
ところがこの黒島村は、天領となる以前から村境の争論が絶えず起こっていた村であった。そこで延宝３年（1675）に前田藩と土方氏の双方の役人が立会いの下で境界が定められ、後々の為に絵図を作成し村々で保管した。道下と黒島の境を示した境絵図は今でも残っている。境界上には千余りの塚を築き、木を植えて目印とした。

特に黒島村は周りを藩領に囲まれて孤立した状態であった為、漁場に対する権利の主張などを巡ってたびたび争いを繰り返していた。
幕府は、幕藩権力の安定と有能な代官の不足から、享保７年（1722）能登の天領の殆どを加賀藩に預け御領所（お預り所＝幕府の地所であるが、日頃の管理は藩で行う）とした。八ヵ郷の中では黒島だけが最後まで天領地とされていたが、それもやがては加賀藩にその支配を委託することなる。

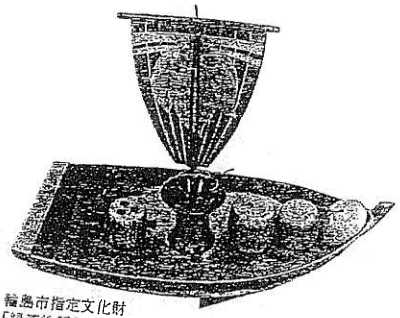
さて、天領となった黒島の村人と藩領である周りの村の人々との間にいかにいざこざが絶えなかった　。

石川県指定有形文化財

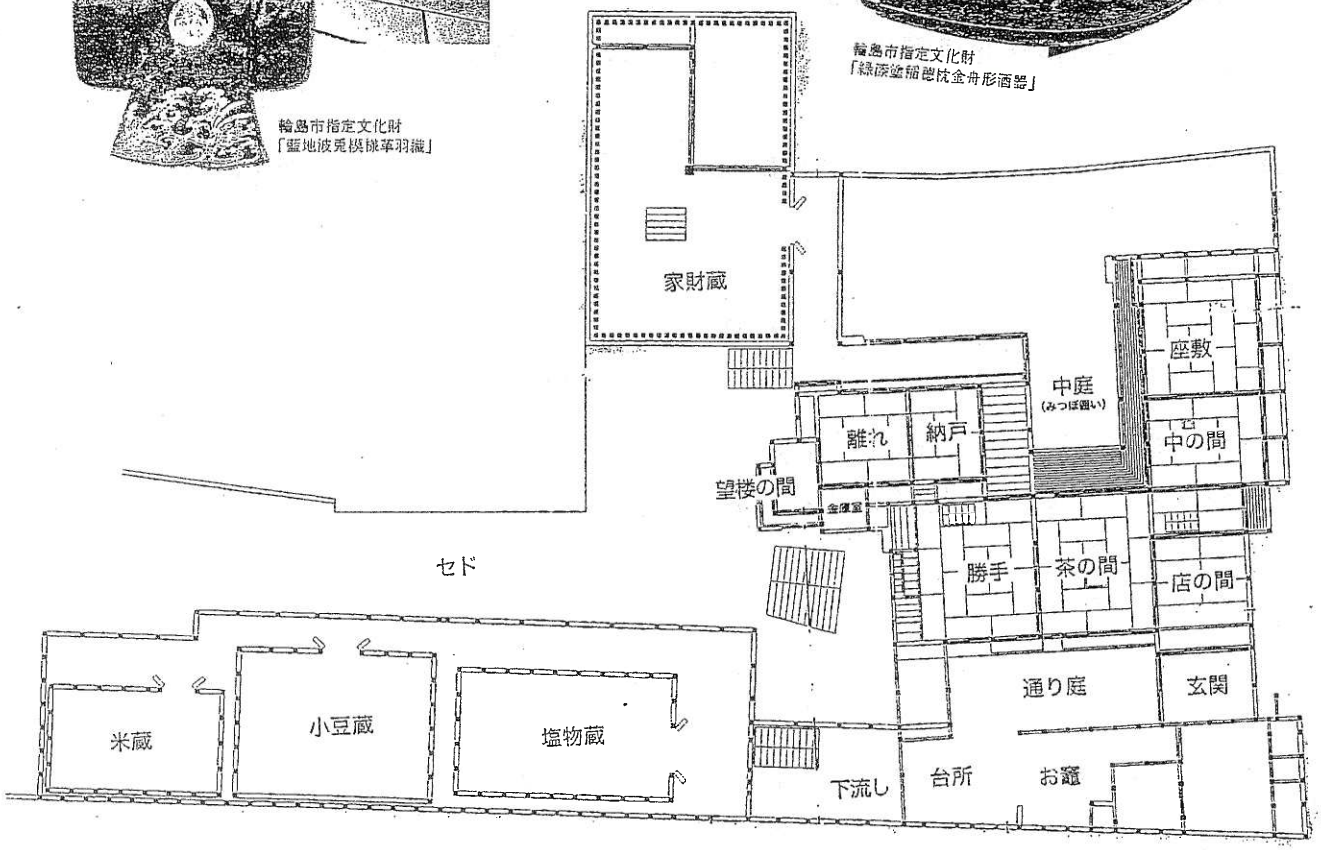
輪島市天領黒島角海家

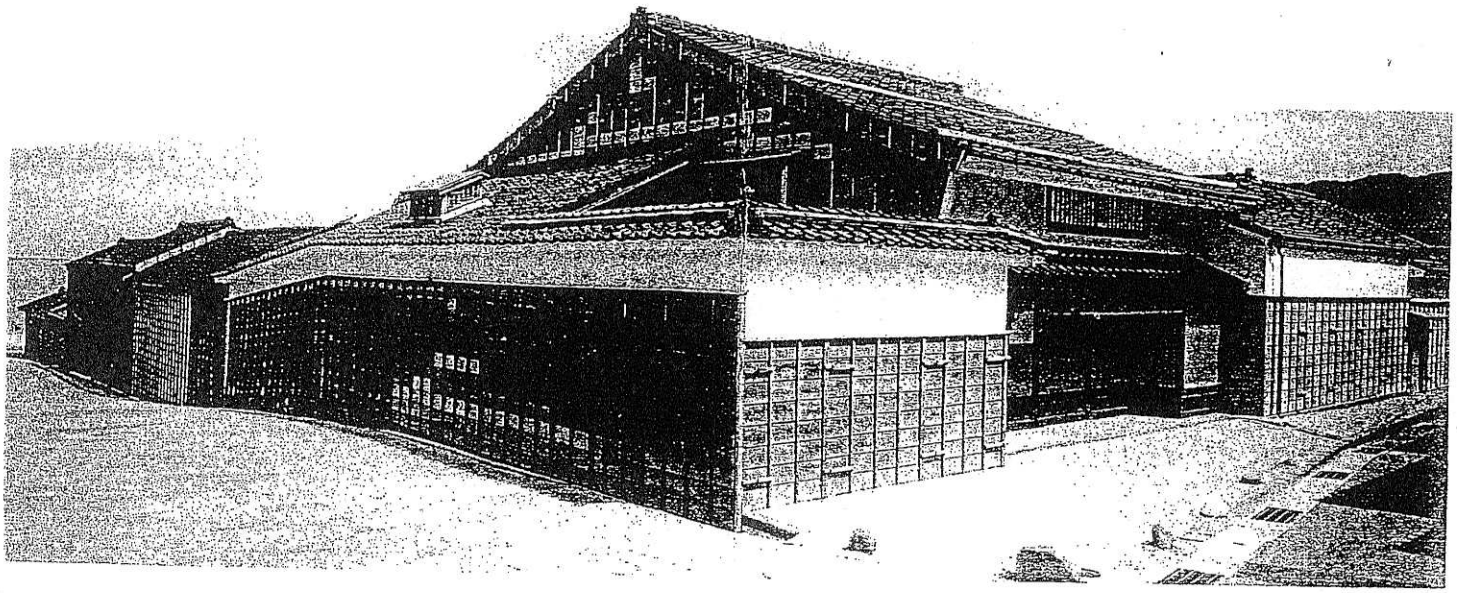


輪島市指定文化財
「藍地波兎模様革羽織」



輪島市指定文化財
「緑磁鹽船型枕金舟形酒器」





MEMO